

場面緘黙のある高校生に対する段階的な介入の効果

遠隔での面談、学校の環境調整、エクスポージャー法の実施を通して

○鈴木 徹

藤井 慶博

武田 篤

（秋田大学教育文化学部）

KEY WORDS: 場面緘黙・環境調整・エクスポージャー法

I 目的

本稿は、場面緘黙の高校生（以下、A さん）に対して、遠隔での面談、学校での環境調整、エクスポージャー法を段階的に実施し、その経過を報告することを目的とした。

II 方法

対象：B 県内の高等学校に通う 16 歳の女子生徒であった。小学校低学年の頃、クラスメイトから話し方を揶揄われたことをきっかけに学校で話をするのが難しくなった。その後、療育施設に勤務する医師から場面緘黙傾向と診断を受けた。高校では、担任とクラスメイト 2 人とは小声で話すことができた。それ以外の人には筆談で対応していた。授業中に声を出して発表することはできなかった。行事の際に固まってしまい動けなくなることもあった。A さん自身が「学校で話をしたい」と強く訴えたため、担任を通じて筆者らに相談があった。下記の取り組みを実施する前に A さんと保護者、担任と面談を行った。話し出すまでに時間を要したものの、筆者の問いかけに A さんは答えることができた。緘黙の程度や発達障害の傾向を把握するため、A さんに SMQ-R と AQ に回答してもらった。SMQ-R は 9 点（学校 2、家庭 6、社会的状況 1）、AQ は 36 点であった。

取り組みの内容：20XX 年 10 月から 20XX+1 年 4 月まで遠隔（Zoom）にて筆頭筆者が面談を実施した（合計 15 回、現在も継続中）。加えて、担任から学校での様子について定期的に情報提供を受けるとともに、学校生活を支えるための環境調整を実施した。取り組みでは、3 つの段階（不安場面のレベル分けと対処法の検討（セッション 1-7）、発話できる他者の拡大及び学校での環境調整（セッション 8-12）、エクスポージャー法の実施（セッション 13-15））を設定した。なお、面談後は振り返りシート（緊張レベル、ワクワクレベルを 10 段階で評価）に記入してもらった。

倫理的配慮：秋田大学手形地区における人を対象とした研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

III 経過

第 1 段階：不安場面のレベル分けと対処法の検討

面談内容：全てのセッションにおいて、はじめに発話練習として週末の出来事と今日の授業の振り返りを行った。発話練習ではクルーズド・クエスチョンを中心に毎回同じ質問を行った。発話練習の後、セッション 2 から 5 では学校での不安場面について話し合った。不安階層表を使用し、授業・部活動・行事で不安に感じる場面のレベル分けを行った。セッション 6 から 8 では、それらの場面のレベルごとに「どのような手段を用いれば（もしくはどのような状況であれば）少し緊張が和らぐのか」について話し合った。

A さんの様子：セッション 1 では話始めるまでに数十秒かかってしまったため、発話練習のみを行った。表情は固く、笑うことはなかった。話し出す時に片腕を強く握むことがあり、画面を通して緊張が伝わってきた。セッションを重ねるごとに徐々に表情が柔らかくなるとともに、スムーズに話し出すようになってきた。振り返りシートでは、緊張レベルが高く、ワクワクレベルが低かった。

学校の対応：A さんの緊張を和らげる、場面緘黙の理解を深めることを目的に担任には面談に同席してもらった。

第 2 段階：発話できる他者の拡大及び学校での環境調整

面談内容：発話練習では時折オープン・クエスチョンを取り入れるようにした。その後、発話できる他者の拡大を図るために特別支援教育を専攻する大学生とのフリートークを加えた。

A さんの様子：発話練習で笑顔を見せることが増えた。大学生とのフリートークでは話し始めるまでに時間がかかることもあったが、その時間は徐々に短くなった。ただ、「大学生からの問いかけに A さんが答える」という単調なやりとりが続いた。そのため、トークテーマは事前に A さんに伝えるとともに、セッション 9 と 10 では、発話練習の際に大学生とのフリートークでの質問を筆者と一緒に考えるようにした。セッション 11 以降はフリートークで自発的に質問するようになった。「事前に質問を考えていると話しやすい」との発言があった。振り返りシートでは緊張レベルは高いものの、ワクワクレベルが徐々に高くなってきた。

学校の対応：面談への同席とともに、学校生活での不安階層表に基づき、授業中の指名や発表の仕方について教員の意志統一を図った。行事の際にはどのような配慮が必要か本人から事前に聞き取るようにした。この頃から、他の教員から「授業中に発言した」、「部活動の際に友達と話していた」などの報告を担当が受けるようになった。

第 3 段階：エクスポージャー法の実施

面談内容：発話練習では、オープン・クエスチョンとクローズド・クエスチョンを組み合わせながら行った。大学生とのフリートークでは、その場でテーマを考える、もしくは筆者が指定したテーマで話すようにした。学校生活での不安階層表をもとに、不安レベルの低いものから対処法を活用しながらエクスポージャーを行った。その成果を次の面談で話し合うようにした。

A さんの様子：発話練習と大学生とのフリートークでは、表情が固くなることはなく、面白かったエピソードを笑いながら話すようになった。この頃から、振り返りシートでは緊張レベルが低くなり、ワクワクレベルが高くなった。エクスポージャーは概ね良好であり、目標とした行動をクリアできていた。たとえうまくいかなかったとしても「ここまでではできたので、次はできると思う」などと前向きな発言を行うようになった。また、この頃から「私のどこが変わってきていると思いますか？」などと筆者に質問してくるようになった。

学校の対応：第 2 段階と同様の対応をとった。

IV まとめ

A さんの様子から、場面緘黙の傾向が段階的に解消に向かってきていることが伺える。その要因としては、面談内容を固定しつつもその中に柔軟性を持たせたこと、学校での環境調整をスムーズに行えたことなどが挙げられる。今後、本取り組みの効果について多角的な検証を行う。

（SUZUKI Toru, FUJII Yoshihiro, TAKEDA Atsushi）